

# 隨感

藤園女

## 一 子供の看病は慈父母に限る事

白金も黄金も玉も何せんに、まさされる寶子にしかめやも、は何人も知る所で、其の愛兒の病氣にかゝる程慈父母を痛心させるものはありますまい。利害問題や義理問題で其の子の生命を欲する様な薄弱なものではありませんまい、實に心頭を衝いて起る愛惜の念、胸裏に充つる可憐の情、我が身をこゝに縮めても愛兒の病魔を去らせんと、目に見えぬ神佛に祈るのであります、其の時起る勇猛心愛兒を平癒させんと希ふ時に起る鐵石の心、嗚呼之ありてこそ難病も治癒するのであります。

私は本年五人の愛兒を百日咳にかゝらせました一人の時に於て嚴重に交通遮断して一室に閉ぢ込め傳染の豫防をいたしました、無功に終りました。

て五幼兒はコ、咳き出しました、一家寄つて食事の際も、一杯か二杯食し終るとすぐ吐瀉する、いつも金盥や痰壺を用意して食卓につくのであります、之れが又不思議に一人が咳き初めますと他兒が始めますので殆んど食事中落付いて御飯も戴かれないのであります、大抵短いのは三分位ですが五分十分十五分、長い時には一時間咳き通した事が一度ありました、しかし余病さへ起らなければ生命に別條はないとの事で、用心して他病の襲來を防ぎましたが、不幸にも私自分が急性腸加多兒を患へまして大騒しました。

二日ばかり私が病床にいたのが手落の主因で當日は尤も寒い日でありました私の枕頭に長女が來まして、蒼い顔をして、床につきたいと申しま

すから、私と床を並べて臥させました。

早速醫師を迎へましたが、風邪との事で余り心配もなささうで御座いましたが、私の胸は何となく不安で御座いました、翌朝は寝て居る氣もいたしませんので、起き出で、看護いたして居りましたが、咳は益々はげしく、食慾は全く絶えて、體温は三十九度でありました、多分は肺炎であらうと存じて早速醫師を呼びました。

生憎留守で其日の三時頃來診して下さいました、案の通り肺炎の併發で御座いました、之は大變と今更騒ぐ譯でもありませんが、何となく心配が増しまして吸入よ濕布よと看護に手落なない様にしたしました。

其の夜から二男が又發熱いたし、しきりに苦痛を訴へます、早速診察を乞ひますと、之れ又肺炎しかも重體との事、醫師も大變に危なれました、一人下さへも兒供の病氣の看護は手が加つて大變

ですのに、二人は肺炎、三人は百日咳でコンくとやつて居ります、とても奥様が一人では届きませんまいと心配されました。

天なるか、運なるか翌日の來診の結果、長女はさ程でもありませんが二男は生命危篤に陥りました、醫師も匙を投げまして、今急にすぐとも申しませんが、多分心臓麻痺で逝くかと思ひますから呼吸が困難になりましたら、すぐお使を下さいと申し残して歸られました。

雨はシト／＼降ります、四兒は皆床を並べて泣いて居るのや、おねだりをして居るのや、眠つて居るのがあります、驗温器を片手に私はボンヤリ雨の音を聞くともなしに病兒を眺めては何とはなしに涙がホロ／＼こぼれるのでありました、ア、七年といへば短い様で長い其の間一時たりとも油断せで育て上げ來年は學校々々と樂みし愛兒の今一朝にして病魔の手に奪ひ去られんとす、湧き出

る様な血涙……しかも此一兒を失はんか落膽の  
余り他病兒の運命やいかに。

靴音急はしく歸りませし良人に、具に容體を申  
上げました、良人もいと愁嘆の聲も低く、今失  
つては……とあとは互に吐息に終るのみ、稍あり  
て良人は今一應主任醫に相談して小兒科専門の立  
會醫を頼まんとて出て行かれました。

夕方になりまして立會醫が見えました、丁寧に  
診察の結果主任醫と同一の診斷でありました、よ  
く手を盡してあります、以れ以上手當の方法はあ  
りませんと申されました、ア、絶望か。

私は思ひました此の上は、至れり盡せりの看護  
を以て之を治するの外手段はありません、精神一  
倒何事か成らざらん、ア、然なり然なり天地神佛  
も照覽あれ、我が兒を思ふ至情を以て、斯病を治  
せでは止むべき、と満身の勇氣を鼓舞しまして、  
敵よ來れ病魔の敵よ、我れ汝に勝つ事を得ずば愛

兒の變りに我が生命を此處に絶たんと心に叫びま  
して吸入に取りかかりました。

夜の更くるにつれて静かになる、静かになるに  
連れて益々思はつものる、多分心臓麻痺で逝かんと  
御察しするとの主任醫のお言葉が胸に浮びます、  
ア、夢であれかし、嘘なれかし、誤診であれと願  
ふも甲斐なや、愛兒の呼吸はいと切にして、言  
語も出でず只幽に眼を開くのみ。

雨はいよ／＼降りしきり、さらぬもしげき袖の  
露あはれ幾度しぼつたで御座いませう、胸にあて  
ました氷嚢 四個は二時間ばかりで湯の様になり  
ます、頭をひやす氷枕に氷嚢もすぐ暖まりま  
す、吸入の世話、湿布の取換、大小便の世話、服  
藥の世話で殆んど隙はありませんでした。

吸入しながら愛兒を慰藉するのであります、  
通じるやら通じないやら分らぬ様に只弱い息をふ  
き返すばかりでありました。

三度目に臺所に氷を取換に行きました時、下女は起き出でました、一貫五百目の氷はモー皆無となりました。三ポンドのアルコールもなくなりました。

心盡しは無駄ではありませんでした、翌朝は大分呼吸の仕具合が確になりました、一週間ばかり続けましたら大分快方に向ひまして今日では丈夫になりました。

何公爵家の若君が肺炎で逝かれたとか、何伯爵家の坊様が氣管支加多兒で亡くなられしとが、其の他かゝる貴族華族富豪の手の届かぬ筈のない家によく、愛兒を失はれて一家悲嘆の涙に暮れられるのは、醫師なり看護婦なり其形式に於て完備して居りましても、却て此の何物を以ても購ふ事の出来ない、親の至情、これが缺けて居ると申しては失禮かも知れませんが、どうしても此れが充分に發揮して居ないのでなからうかと存じます。

私はつくづく感じました、どうしても愛兒の看病は慈父母に限ると、決して慈父母を除いて他に適任者はないのであります、看護婦の如きは只形式に於て完備して居りませうが、誠意が足らない誠意があつても親の子を思ふ情には、とても及びもつきません。』

## 二 嘘言の恐るべき事

子供を育てるのに嘘言をなすまじとは千も百も承知して、決して子供の前で嘘を言ふものでないと知りながらしかも、世の母様は如何で御座いませうか、孟母が豚肉を買ひ來りし話は文明の今日母となるべき人の知らぬ人は少ないでせうが、しかも其通り嘘を教へないで主派に育兒の任を全ふせらるゝ母様が幾人ありませうか、すべての罪惡の根原は此恐るべく厭ふべき嘘にあるといふも過言でない程大事な嘘を子供に教へない母様が御座いませうか、母自身が不知不識の間に嘘を教へて

自らの罪を悟らず其子が嘘をつくとして怒る母様はないでしようか、しかし其嘘は母親自ら意識する事なしになしつゝある事が多い、大なる嘘に至つては子供の前と否とに關らず、嘘を言ふ事の耻しくて殆んど嘘はつけますまいが、何でもないと思ふ平常の行の中に含まるゝ嘘の數多くして恐るべきパチルスなりと氣がついて其嘘を排斥し、純潔なる家庭の中に立派に天使の如き幼男幼女を育てらるゝ母様が廣い世界に幾人ありませうか、私はかつて菊池男爵の夫人が宅では子供を躰るのに大抵な悪戯は余り小言を申しませんが只嘘に至つては其事小なりとも決して寛容しませんと言はれましたが成程と思ひました、育児がどうか、教育がどうかとやかましく言ふて居らるゝ立派な家庭の中下育らるゝ子供は如何に幸多い事かと其内幕を観察いたしますと案外かゝる點に留意せらるゝ事の少ないのに驚くのであります、美しい着物を飾

らせて下女に委ねて安逸に耽らるゝ母様は論ずるに足らず、しかも身體の健康を憂ひ將來の發達を慮らるゝ賢明なる母様も嘘を恐れて厭はるゝ人がありませうが、其嘘恐るべきパチルスは多くの家庭で何でもない様に思はるゝ、そらオバケが出る泣くなゝゝお馬を見せてやりませう、ワン／＼が來たの類であります、大人から見れば只一時子供の泣くのを止める方便でしょうが其の嘘は泣かせておくより害多き嘘つきの根を子供の腦裏に植えつけるのであります。

私は昨日五歳になる男兒に七歳になる兄の羽織をかりて外出せしめ様といたしました、七歳になる子が不服を申して何といふても聞入れません仕立たばかりの羽織でまだ何れが何れとも決まつてありませんが只何かなしに七歳の子のであるといふてあつたのです、次の分が仕立上つて決定したいと思ふて居りましたから、七歳の子にダツテ

お前のとは未だ決まらないのだからかまはないと少し曖昧な事を申して心地悪く自分ながら思ふて居りました、七歳になる子は少しノロイ方で何とも申しませんで其儘外出しました。

歸宅して二三時間経て入湯しました、生憎五歳になる兒の手拭が見えなくて、姉の分がありまして、兒は掛竿よりコッソリと取り洗ひ笑ひながら私に申しました、母さん内密にしてよ姉さんに言はないで下さいよ、と、私は又何故ですか借りたら借りたでよいではないかと申しますと、兒は姉さんは使ふと怒るからと申します、怒つたてよいが怒れはしりません、母さんがよく言ふて上ますから、ソナ嘘を言ふのではありませんよと申しますと兒はすかさず、母さんだつて嘘を言ふてだから僕も嘘をつくのですと大真面目、何を母さんが嘘をつきましたかと申しますと、子供は先刻母さんは兄さんの羽織をそうでないとお仰つた、

アレは嘘ではないのと、ア、あやまります母さんが悪かつたと五歳の幼兒に赤面いたす様な事が御座いました、子供だから構はないと世間ではよく子供を馬鹿にする様な人が御座いますが大變な間違、子供だからよく氣をつけて行かねばならぬ事と今更の様につく／＼感じたのであります。』

### 三 怒るべき場合に怒るべき事

すべて大人でも子供でも少しの事によく怒る人があります、或は怒らない様に面に平氣を装ふて中心不平に堪えない人もありますが、此等は大抵原因が自己の見識の狭い爲に何でもない事に怒り人には笑はれ、自己には不經濟に精力を費して、自己共に損をする所が多いのであります、かゝる事は素より修養によりて其弊を除き或は減ずる事が出来ませんが、大人になつてから治するのは中々困難で御座います、だから幼少の頃から母親が氣をつけて其弊に陥らぬ工夫が大事ではありますま

いか。

今朝私こんでうたくしは食事しょくじする際に、皆食卓みなしょくたくにつかせ様と存ぞんじて呼びましたが長男ちやうなんは一生懸命しやうけんめい書き物かきものをして居ゐりました故ゆゑか中々なかなか食堂しょくどうに参まゐりません、他の兒ほかのこを以もつて言いはしめましても未まだ参まりません、やむなく皆みなで食事しょくじを始めはじめました、中頃なかごろ長男ちやうなんは食堂しょくどうに入り來きるや否いな食卓しょくたくを一見いつけんして不平ふへいの色包いろつづみが大たくいきなり妹いもに向むかつてどなりつけました、ソレは自分じぶんのお汁じゆをなでよそはないかとの不平ふへいでありました、妹いもはオロ／＼として居ゐります、他の兒ほかのこは一齋いつせいに目をそばだてました、私は心中しんちゆうかゝる機會きかいにこそと、しばらく長男ちやうなんの怒いかりの鎮わたまるのを待まちちまして、お汁じゆの熱あついのをよそひつゝ、お身みはリコーだけれと未まだ幼少ちやうちやうな丈だけに智惠ちえがありません、智惠ちえがないから怒おこらないで宜よろしい時に怒おこつて自ら不愉快ふゆかいに且かつつ人を不愉快ふゆかいに導みちくのであります、今お身みのお汁じゆを一番いちばんによそつておかなかつたのは、お身みにお甘いしい所ところ

を吸すはせたい母ははの情じやうです、少しでもお身みの身體からだの健康けんかうを増まさす事ことについて苦心くしんして居ゐる母ははの慈愛じあいの發現はつげんです、皆みな一緒いっしょによそつてお前まへの分ぶんを一番いちばん先にすませておけばお前まへが此處こゝに來きるまで瓦斯わすをたいて不經濟ふけいぎな事ことをしておかないでもすむ、しかし此こゝの寒さむい最中さいちゆう、十分じふぶんも十五分じふごぶんも前まへによそつたお汁じゆを吞のんで滋養じゆうぎやうになるでしようか、言いはずも知しれ切きつた事こと、お寒さむい時には成丈なるだけ温ぬかな物を食たべさせて色いろ艶つやのよくなるを見みて獨ひとりり心筋こころのきんに喜よろこぶは母ははの子こを思おもふ情じやう、且かつつやお前まへは食事しょくじを報ほうじても來きない、自己じこの落度おちどを棚たなに上げて母ははに對たいしては怒おこる譯わけに行いかないから妹いもに怒いかりを移うつすとは何事なにこと、それでも一等とうとうの兄にいさんと尊たつとばれて五人ごにんの弟妹ていまいの上うへに立たてますか、五人ごにんの弟妹ていまいの手本てほんとして耻はづかしくありませんか、人は怒おこるべきものでないとは申まうしませんか怒おこつて益えきない様な怒いかりは實じつに自他じたの損害そんがいを招まねくばかりです、怒おこらざるを得えざる場合に怒おこる事ことの出來できない様な卑屈ひくつになるは無論むろん避さぐべき事ことですが今いまの様な怒おこつて會あ己じの不明不識ふめいふしを人ひとに現あらわす様な場合に怒おこるは愚おろかな

至りです。

今の場合は怒る所の事でなく、自己の遅刻を詫  
び且つ母の情に感謝の意を表するが至當ではあり  
ますまいか、之れから長ずるに従つてかゝる場合  
に遭遇する事も数々ありませうがよく其時の真相  
を見徹して、その後これ相當の處置をすべきで  
あります、重荷を負ひて遠き道行くにぞ似たる人  
生は、種々の出来事の數限りもありません怒るべ  
き場合、泣くべき場合、笑ふべき場合、恨むべき  
場合、悔ゆべき場合、恥べき場合、喜ぶべき場合  
………色々な場合に出逢ふ事がありました時眞  
に泣くべき場合かどうか、眞に怒るべき場合かど  
うかといふ事を最も迅速に看破し、眞に怒るべき  
場合には適度に怒るもよろしい、眞に泣くべき場  
合には泣くもよろしい、只徒らに皮相のみによつ  
て情の發するまゝに怒り泣くはよろしくありません、  
況や今の如き間違つた事で怒るなどは最も戒  
むべき事です以後かゝる間違のない様氣をおつけ  
なさいと、十二歳にしては少し大人びた子ですか  
ら少しは解つた様で御座いました。』

## 雜 錄

### 本會主催音樂會景況

前號に豫告して置きました本會主催の音樂會は、豫定の如く客  
月廿五日下午一時より、東京女子高等師範學校講堂に於いて開會  
されました。當日は幸にして近來の晴天を見、籬外の春色更らに  
一點の深みを増し、わが催しには最も適ばしい天候でありました  
に、開會時刻に到らずして、滿場既に立錐の地を餘さず、ま  
々に見る盛況を呈しました。刻來りて中川會長の開會の辭終る  
や、順序通りの曲目は、それ／＼樂手の妙技に奏せられ、靜肅な  
空氣に滿ちた講堂内は、たゞ妙なる樂の音が漂ふのみで、殊にベ  
ッオールド夫人の高調なる獨唱は、其の技神に入り、滿場の聽衆  
をして、自ら感激の聲を洩らしむるのみでありました。

今回は第一回の企でありましたので、當日の景況は主催者の大  
に心配して居た處でした。然るに結果は此れに反して、斯程の盛  
況を見ることの出来ましたのは、本會の大に意を強ふる處であ  
ると共に、我が微志ある處を諒とせられ、多くの賛同と助力とな  
興へられました同好の諸氏に、萬腔の感謝を捧げなければなりま  
せん。